



校長室だより

学校と家庭・地域を結ぶ架け橋通信

第21号 令和4年1月18日

小美玉市立美野里中学校

改めて防災について思う ～阪神・淡路大震災から27年～

昨日1月17日で阪神・淡路大震災から27年が経過しました。平成7年(1995年)1月17日午前5時46分、淡路島北淡町野島断層を震源とするマグニチュード7.3の阪神・淡路大震災が発生しました。朝ご飯を作っている時間だったこともあり、火災も多数発生し、この地震により、死者6,434人、重軽傷者者43,792人、全半壊家屋274,181棟の大災害となりました。昨日、発生時刻に合わせて追悼行事が行われました。生徒たちは、まだ生まれていませんから、記憶にあらうはずありませんが、風化を危ぶむ声が多く聞かれます。

私は27年前、春休みを利用して、数日間現地に赴いてボランティアを行いました。

そのときのエピソードをお伝えします。避難所で、到着した物資の荷下ろしや炊き出しの手伝いをしました。避難所の中央に、炊き出しを配るスペースがありましたが、中には、家族が目の前でタンスや棚の下敷きになって亡くなった方もいらっしゃいました。まるで、夢遊病者のようにうつろな目で、炊き出しの列に並んでいらっしゃいました。

また、空いた時間に市中を見て歩きましたが、真っ二つに割れたビルやぐにゃりと曲がった高架橋など、映画にでも出てきそうな光景が目の前にありました。

阪神・淡路大震災は、ボランティア元年とも言われました。東日本大震災の時も2回ほどボランティアで現地に赴きましたが、ボランティアを行うにあたって感じたことは、ボランティアは「現地の方の迷惑にならないよう」できることをできる範囲で行うことが大切だということです。

もう一つ、頭が下がる思いなので、ご紹介させていただきたいと思うのは、私が東日本大震災のボランティアとして、宮城県に行ったときのボランティアバスのお話です。石塚観光の社長の熱い思いなのでしょうが、このボランティアバスが、震災から10年以上経った今現在でも運行され続けているということです。

私が、宮城県の被災地区で、ご家庭の縁の下に入った汚泥の除去をさせていただいたとき感じたのは、テレビでは伝わらないにおいでした。この汚泥の上で生活するのは、さぞつらかったろうと思います。もちろん衛生的にも大変だったと思います。

石塚観光の社長は、この震災での被害や教訓を風化させないためにも、ぜひ現地を見てほしいという思いから、いまだにバスを運行し続けているのだと思います。

日本時間の1月15日午後1時10分ごろ、トンガ諸島で大規模な噴火が発生しました。この噴火により、日本でも太平洋側を中心に全国各地に津波が到達し、鹿児島県の奄美大島の小湊では1メートル20センチを観測しました。幸い小美玉市は、海や大きな川の沿岸ではなく、高い山があるわけでもなく、自然災害が少ない土地であるのかも知れません。しかし、地震や台風など、地域に関係なく被害が起こる災害には備えていかなければなりません。

コロナ禍であっても、凍えるような真夜中であっても、災害は時を選ばず起こります。防災には、地域が一体となって取り組む必要性があります。また、各家庭でも防災意識を高める必要があります。ご自宅のリビング等を見渡したとき、倒れやすくなっている棚や怪我に結び付く落下物はないでしょうか。懐中電灯の電池は切れていないでしょうか。もう一度、細心の注意を払って、環境を見渡してみてください。お一人お一人の大切な命を守り抜く準備を改めていただければと思います。

